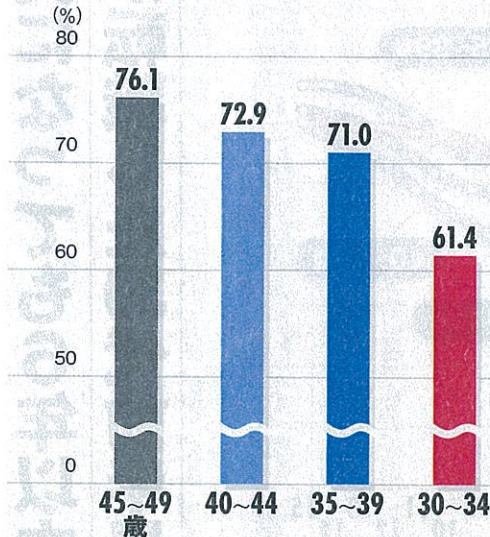


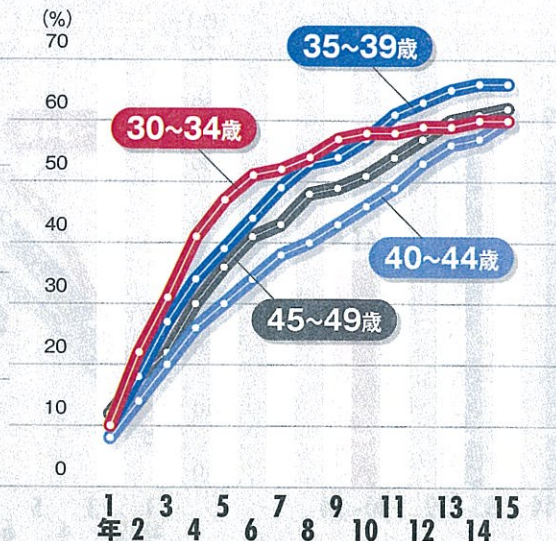
初職が正社員の男性の転職時期が早くなっている

年代別初職が正社員だった割合(男性)



*年齢は2011年4月時点
出所:白石浩介・藤井麻由・高山憲之
「初職正規男性の早期転職をめぐる一考察」未定稿

年代別累積離職率の推移



*年齢は11年4月時点。
横軸は初職入社時からの経過年数(X年未満)を表す
出所:同左

FLINT HILL

正社員になっても6年以内に半数が転職した30代前半男性

始めよければ終わりよし。日本には、このような言い習わしがある。しかし、最近における若者の就業状況は、そのようには必ずしもなっていない。

(財)年金シニアプラン総合研究機構
研究主幹・一橋大学特任教授

高山憲之
Noriyuki Takayama



この間、日本の雇用環境は年々総じて厳しさを増していた。それにもかかわらず、せっかく手にした正社員という地位を、早々に捨ててしまおう若者が少なくなっている。

正社員という地位は、日本では長期雇用や安定した賃金、さらには中身の濃い継続的な企業内訓練を約束するものであった。しかし、バブルが崩壊した後、厳しい経営環境下で企業は正社員の処遇を変えてきた可能性が高い。

ちなみに年功賃金のフラット化はどこでも見られた動きである。さらに「期限に定めのない雇用」をうたって新卒を大量に採用する一方、正社員であるのをいいことに過酷な長時間労働を低報酬のまま若者に強い、早期に彼らを切り捨てているブラック企業も少なくない。

「卒業後3年以内は新卒扱い」というような政策が若者の雇用環境を抜本的に改善するか否かを再検討する必要がある。

になるのは、45~49歳層では入職10年後、30~34歳層では入職6年後であった。初職正社員男性の半数が入社後6~10年で初職企業を辞めていた。

調査データは、高等学校や大学等を卒業すると同時に正社員として会社勤務を始めた男性の離職・転職状況を調べるために、世代間問題研究プロジェクトが2011年11月に実施した「くらしと仕事に関する調査」である。同年4月に30~49歳であった男性1994人が回答している。

まず、左のグラフによると、初職における正社員割合は若い世代になるほど低くなり、30~34歳層では61%となっていた。若者が正社員として入職することは年々厳しさを増している。

次に、右のグラフは、初職正社員の男性1403人が入職後どのように初職から離職・転職していたかを調べた結果である。それによると、入職後1年未満で初職から離職する人が最も多い。入職後3年未満の離職も確かに多いものの、入職4年目以降においても初職からの離職は止まっていない。

初職からの累積離職率が50%超